相撲風雲児列伝

石井代蔵

相撲風雲児列伝
石井代蔵
© Daizo Ishii 1984

講談社文庫
定価420円

昭和59年1月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——株式会社東京印書館
印刷——株式会社東京印書館
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-183148-8 (0)

講談社文庫

相撲風雲児列伝

石井代蔵

目次

押しの一手　小説　若羽黒朋明　七
巨人　小説　出羽ケ嶽文治郎　六一
馬じゃあるめえし　小説　男女ノ川登三　一三七
豪傑　小説　前田山英五郎　一八三
孤児　小説　東富士謹一　二六七
あとがき　三四二
解説　阿部宏　三四四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

相撲風雲児列伝

押しの一手

小説　若羽黒朋明

草深朋明氏（元大関若羽黒）

二日午前四時三十一分、脳そくせん症のため岡山市内山下の岡山赤十字病院で死去、三十四歳。告別式は三日午後三時から岡山市田町一丁目四ノ一二、蓮昌寺で。喪主は実弟の栄一氏。二十四年立浪部屋に入門、三十年春場所入幕、三十四年秋場所後大関へ昇進し、九州場所で初優勝、四十年三月に廃業した。

昭和四十四年三月三日付の新聞にのった死亡記事だった。

1

「押すに手なし」

と、いわれる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

極意という神通力めいた形容が、人間技として実際にあるとすれば、「押すに手なし」は文字通り相撲取り口の極意のひとつに違いない。近代相撲では、力士のだれもがいやがって、やらないからだ。

待ったなしで、パッと立った瞬間、相手にひと息入れる猶予を与えず、喉輪をきかして一直線に土俵外に突き進む相撲である。強烈な押っつけ一本を武器に、巨体を爆発的に相手にぶちかます単純明快な荒技だ。ぶちかまされた相手はひと息いれ、態勢を立て直すいとまもない。

極り手は典型的な押し出し。ただわずかに寄切り、巻落しなどのかたちになることがある。相手を瞬時に打ちのめす人間技として、これ以上の極意はない。しかし、所詮は人間技である。失敗したばあい、これほど見事に逆転敗けする取り口もまたない。相手にするりとかわされたとき、巨体が空を切ってぶざまにすっ飛ぶのだ。一番、一番そつなく勝負を取る近代相撲で、どの関取もいやがる所以がそこにあった。

大関若羽黒の相撲は、「押すに手なし」の極意ひとつに徹した貴重な記録だった。その取り口一本だけで、若羽黒は大関の座まで勝ち取ったのだ——。

後年大成した相撲取りは、その入門時のいわれや動機が、伝説めいて語られるのが常である。横綱、大関という何千人に一人という逸材の誕生は、その入門時ですでに大きな賭けであるからだ。

昭和二十四年のことである。

終戦まもない横浜は、派手な原色のアロハを着たアメリカ兵や彼らにまとう女たちの嬌声があ

ふれ、港街は昼夜わかたず人間臭い熱気で活気づいていた。

横浜市中区曙町は、歓楽街伊勢佐木町と平行して走る電車通りである。その往来に面したクリーニング屋から、のちの大関がでた。

横浜出身の力士は、過去にわずかに一人、二人いたが、大成した者は一人もいない。昭和十年代の横綱武蔵山武は、横浜とはいえ多摩川に面した当時の神奈川県橘樹郡日吉村の出である。「浜っ子」とはいえない。ミナト横浜独特の喧嘩早い、開放的な土地柄は、そもそも事大主義的な大相撲世界とは水があわないのかもしれなかった。

若羽黒は、まるで人さらいに似た強引なかたちで入門させられた。その年の夏休み、中学三年生のときである。発見者は立行司、十九代式守伊之助（二十六年九月襲名）。やがて「ひげの伊之助」の名で名行司とうたわれる老人である。

少年は、名門立浪部屋に連れられてきた。

「ほう、これは、これは……」

そのとき、少年の体軀を見て、そう感嘆した人物がいる。仁王に似た浅黒い顔のなかで、小さな両眼がぎらぎらと少年の体軀を睨めまわしていた。他でもない、名門立浪部屋の総帥、横綱羽黒山だった。協会取締の要職にある岳父、立浪弥右衛門が高齢で健在とはいえ、ほとんど隠居同然、事実上すでに次代立浪部屋を一身に背負う総帥であった。

当時、相撲部屋は、本場所、地方巡業の興行収益で部屋の経営いっさいをたてていた丼勘定の時代である。たった一人の横綱、あるいは人気関取数人をだすだけで、その関取に人気が殺到し、

後援会がつき、同時に部屋も栄える。その繁栄ぶりは、土俵上の関取一人の勝敗で大きく揺れ動くのだ。その一人の逸材を生みだすためにのみ、相撲部屋は多くの力士をごろごろと飼い育てているといえた。部屋持ち親方の優劣は、相撲の手も知らぬ丸裸の人門者について、直感的に将来を見通せる眼力いかんにかかっているのだ。

「これは、これは」

と、羽黒山はいったまま、あとは声がない。

稽古場に展開している猛烈な肉体のぶつかり合いに気圧されるふうもなく、少年は見学者のような顔つきで、けろりとあたりを眺めまわしている。いかにも負けん気が強そうだ。プリプリ太った浅黒い体は骨太で、相撲のために生れてきたような体つきなのだ。

それにしては、両親の付添いもない。伊之助一人が、同道しているだけである。稽古土俵にもろ肌ぬぎになってつっ立った羽黒山は、怒ったように少年の全身を睨めまわしながら、顎をしゃくった。

「坊主、どこからきた？」

「横浜ンです」

「横浜？」

「浜っ子です、親方」

伊之助はあわてて畳に手をついた。この年、伊之助はすでに六十二歳を数えた。名行司といわれ、きらびやかな装束を身にまとい、土俵上で見事な裁きをみせる伊之助が、いま小さな枯れた

体をさらに小さくして、もろ肌ぬぎでつっ立った親方の前に両手をついていた。
「親方、ひとつよろしくお願い申します。このとおり、当人は相撲ひとつ知りませんが、なにしろ大変な餓鬼大将で、中学校でも近所でも持てあましていますが、わっしゃこれはいける、とみたてたんです」
行司は大観客の目が集中する土俵上でこそ花形役者だが、大相撲世界の実生活では権威のかけらもない裏方にしかすぎないのだ。まともな人間なら、ばかばかしくて勤まらぬその行司一筋に、十三歳のとき小僧行司、金吾の名で初土俵を踏んでいらい、辛抱の二字に生涯を賭けてきた伊之助である。
尋常ではない意地がある。その男の意地を実らす夢がたったひとつ残されていた。
それは、天下に恥じない関取の生みの親になることだ。
伊之助は生涯たったひとつの意地のために、頭を畳に押しつけていた。
立浪の総帥、羽黒山は、その伊之助の姿に目もくれず、右手の竹刀を不気味に震わせながら、四股を踏むような動作で、
「どうだ、坊主！」
するどく割れるような太い声が飛んだ。
「相撲をやるかッ！」
「いやだよ」
「なにイ！」

ピシッ、と突き刺すような音が、稽古場の鉄砲柱に叩きつけられた。竹刀が、目の前で激しく打ちおろされたのだ。

「相撲はいやか。えッ？」

と、顎をしゃくって、伊之助をみた。

「めっそうもない」

伊之助の白い少年のような顔が震えた。

「親方、これこのとおりの餓鬼大将で、ホン坊同然です。ついさっきまでは、大関なんぞすぐなってやらあ、と大層なことをいってたと思うと、もうこのざまです。人間がどうもなまくらでいけません」

そのとき、奥の部屋から暖簾をくぐって背広姿の大男が出てきて、靴底のような厚い手で、ぱんと少年の肩を叩いた。鳴戸親方（元大岩山）だった。

「なあ、兄さん。土俵のなかにはな、宝物がいっぱいころがってるぞ。相撲取りになれよ、な」

後年、若羽黒が部屋中からつまはじきにされたとき、立浪部屋の多くの居候年寄衆のなかで、この親方一人が最後まで若羽黒の面倒をみた。

羽黒山は竹刀をぶんぶん唸らせながら、少年のふてくされた面構えに視線を光らしていた。その目は狼のように輝いている。

「わかったな、坊主」

と、畳にあぐらをかきながら、鳴戸親方がつづけた。

「相撲取りになるんだなあ。……親方、これは、大物になりますぜ。さっそく今晩からわしが面倒をみましょう。わっしからも、あらためて親方にお願い申しときますぜ」

「それは有難い」

伊之助は驚いたように顔をあげ、畳に手をついたまま羽黒山の目にすきとおるような視線をあてた。

「師匠、どうかひとつ、存分に叩きあげてやってください」

その間、少年は頭ひとつさげず、大きな手でチューインガムの紙をむいている。稽古土俵では激しい申し合いが展開されている。羽黒山は充血したような目つきで、少年の面を凝視しつづけていた。息を殺し、口の中でガラスを噛み砕くような音をたて、上下の歯を噛み合わせながら、やがて極めつけるように伊之助の方を向いていった。

「よッし。引き取りましょう。やりますぜ」

その夜、少年は有無をいわさず部屋に寝かされた。

立浪部屋一行の北海道巡業が出発したのは、その数日後のことだった。逃げだす間もなく、少年はその大相撲一行の旅にまじっていた。

四股名は若羽黒。横綱羽黒山の羽黒の二字を入門そうそう与えられたこと自体、少年の将来は羽黒山自身によって、確実視されていたといえる。事実、三年後の二十七年十二月、七十四歳で逝く先代をついで名実ともに立浪部屋を継承する羽黒山にとっても、若羽黒は直弟子第一号であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com